

2026年7月28日 令和8年熊本大地震（M7.1）前兆データ解析

逆ラジオ観測点「高知介良」における電磁波ノイズの減衰・収束パターンと発生メカニズム

概要・観測成果の要約 [cite: 1]

電磁波ノイズを観測する「逆ラジオ」システム（高知市介良観測点）において、大地震発生に先立つ特徴的な電磁波前兆データを捉えることに成功しました [cite: 1]。大地震の前には、数か月～数年前から特異的な巨大電磁波ノイズが連続して出現し、その後ノイズが急激に減衰・収束（沈黙）した直後に発震するという法則性が明確に確認されています [cite: 1]。

この観測手法は、10年前（2016年4月）の熊本地震においても高知市の同装置で前兆データを捉えており、今回の令和8年（2026年）7月28日に発生した熊本大地震（M7.1）においても、全く同じ観測点・同じ観測系で再現性の高い前兆パターンが記録されました [cite: 1]。

対象地震

2026/7/28 熊本M7.1 [cite: 1]

観測ポイント

高知介良（旧高知B449）
[cite: 1]

前兆パターン

長期ノイズ増大 → 収束・発震 [cite: 1]

高知介良観測点におけるノイズ時系列データ [cite: 1]

1. 【高知介良】720日間（2年間）日毎観測データ [cite: 1]

長期傾向分析（2024.08～2026.07） [cite: 1]

約2年前から強い電磁波ノイズ（赤）およびトータルノイズ（緑）が高頻度かつ大規模に発生を継続 [cite: 1]。2026年春以降、長期間続いたノイズのレベルが急激に低下し始めている構造が捉えられています [cite: 1]。

2. 【高知介良】360日間（1年間）日毎観測データ [cite: 1]

中期変化（2025.08～2026.07） [cite: 1]

2025年11月から2026年3月にかけて「強いノイズ」が極大期（ピーク）を形成 [cite: 1]。その後、2026年4月に入るとノイズ強度が急速に減衰曲線を描き、静穏化へ向かいました [cite: 1]。

3. 【高知介良】180日間データ（減衰から発震まで） [cite: 1]

直前収束データ（2026.01～2026.07） [cite: 1]

180日間の拡大データでは、ノイズが完全に低下した「沈黙（減衰）」期間を経て、7月28日のM7.1本震発生に至るプロセスが明瞭に可視化されています [cite: 1]。

2016年・2026年 熊本地震の比較検証 [cite: 1]

項目	2016年 熊本地震 [cite: 1]	2026年 令和8年熊本大地震 [cite: 1]
発生日時 / 規模	2016年4月14日・16日（M7.3等） [cite: 1]	2026年7月28日 16時27分（M7.1） [cite: 1]
観測装置 / 観測点	高知介良 逆ラジオ（旧高知B449） [cite: 1]	高知介良 逆ラジオ（WNI_449） [cite: 1]
震源と観測点の関係	熊本震源域 ⇄ 高知介良（同一ライン） [cite: 1]	熊本震源域 ⇄ 高知介良（同一ライン） [cite: 1]
波形推移の特徴	長期間ノイズ放出 → 収束・発震 [cite: 1]	長期間ノイズ放出 → 収束・発震 [cite: 1]

電磁波前兆（逆ラジオ）による地震予知・微小シグナル捉獲の仕組み [cite: 1]

岩盤に巨大な圧力が加わると、岩石中の微小クラック（亀裂）生成に伴い電電荷が発生し、パルス状の電磁波が放出されます。これが逆ラジオ観測器で「電磁波ノイズ」として捉えられます [cite: 1]。本震直前になると破壊箇所の可塑性変形や岩盤の最終固着によりノイズ放出が一時的にストップ（減衰・収束）し、その直後に大地震が発生します [cite: 1]。